

## 鳥の歌の神経行動学

岡ノ谷 一 夫

鳥学会の多くの会員にとっては、鳥の歌は、行動生態学のテーマとしてよく知られています。鳥の歌はその歌をうたう個体の「Honest Signal」となっているのかどうか？複雑な歌が進化してきた要因はなにか？このような、行動の遠因を求める研究のほか、鳥の歌は近年神経行動学の重大なテーマとなりました。複雑な音声を学び、組み合わせてコミュニケーション信号として用いるのは人間と小鳥だけです。このことから、鳥の歌は、音声学習にともなう神経の可塑性そのもののモデルとして注目されているのです。一昨年岩波新書として出版されたカリフォルニア工科大学・小西正一教授の「小鳥はなぜ歌うのか」はこの分野の優れた入門書となっています。



スズメ目の小鳥の脳には、歌に関係すると思われる神経核（神経のかたまり）が4つ同定されています。このうち2つが歌を直接制御する系を形成し、2つが歌を学習する系を形成していると考えられています。歌をうたうオス成鳥ではこれらが4つとも同定できますが、歌をうたわないメスでは、これらのうち学習に関与する1つの神経核しか同定できません。このように、行動と脳の構成にきれいな対応があるところが、鳥の歌の神経科学的研究にとって大きな魅力となっています。現在の研究の最前線では、これらの神経核が具体的にどんな機能を持つのかを調べあげようとしています。また、学習にともなうシナプス可塑性や、個々の神経核を連絡する伝達物質の同定などの分野で活発な研究がなされています。同種の歌をきくことで、大脳の聴覚・発声に関わる部位に細胞内信号に関わる遺伝子が発現する、といったびっくりするような研究もあらわれています。

日本でもいくつかの研究室で小鳥の歌を使った神経行動学的な研究が行われています。これらの研究の行く末を考えることを目的に、私は今年の7月大阪大学で行われた比較生理生化学会で、「鳥の歌の神経科学—物質・情報・行動—」というテーマでシンポジウムを企画しました。演者として、鳥の歌学習の計算論的モデルの研究をしているATR人間情報通信研究所の銅谷賢治氏、鳥の歌学習にともなう可塑性を制御する物質を同定しようとしている獨協医科大学の坂口博信氏、そして私自身が参加しました。鳥の歌を使った神経科学になにか特殊な利点があるのか、という議論がなされ、私自身も深く反省する機会となりました。

実際、せっかく鳥の歌を研究対象としていながら、鳥の歌が本来どういった文脈で使われる行動であるのかを忘れていて研究が多いのが現状です。一般に鳥の歌は、ライバルとなる他のオスを牽制する機能と、交尾相手となるメスを誘因する機能とがあります。ところが、現在神経行動学でモデル動物となっているキンカチョウでは、そもそもなわばりを作らないものですから、歌はメスの誘因機能が主なもので、ライバルを牽制する機能はほとんどありません。にもかかわらず、キンカチョウの脳における歌の聴覚情報処理を研究している研究者の多くが、

## 巻頭言

オスのみを用いて研究しています。キンカチョウにおいては、歌を聴いて正しく反応しなければならぬのは、オスよりもむしろメスであるはずなのにです。

また、現在の鳥の歌研究には動的な視点が欠けています。なぜでしょうか。去年の北米神経科学学会の年次集会では、鳥の歌に関わる発表が50近くありました。このうち30近くがキンカチョウの歌制御神経系を対象とした研究でした。キンカチョウの歌は極めて短い（500ミリ秒ほど）非常に定型性が高い行動で、行動の記載・分析は容易です。キンカチョウがモデル動物となることで、歌学習に関わる神経系の可塑性の研究がものすごく進みました。しかしながら、キンカチョウの歌が鳥の歌を代表していると考えるのは誤っています。キンカチョウはむしろ外見での性差を際立たせていますから、歌は性行動の信号として副次的なものになっているのではないのでしょうか。キンカチョウ中心主義の弊害のひとつとして、鳥の歌の動的特性に関する研究が非常に少なくなってしまうことが挙げられるのです。歌の動的な特性の進化と、雌雄の神経系による動的な行動の発現と選択はとても面白いテーマですが、現状ではそうした研究には目が向けられていません。

これらの、鳥の歌の神経科学が直面している限界を打破するには、鳥の歌の生態学・進化学の研究者との交流が必要だと思います。神経科学学会、行動学会などの方法論別の学会は、より学問的なにおいがします。それに対し、研究対象別の学会はマニアの集まりになる危険があります。しかし研究対象別の学会には、方法論に束縛されない利点があるはずで、鳥学会はそれをもっと活かさなければなりません。生態や進化など、行動の遠因を研究している人々と、神経科学など、行動の近因を研究している人々は、もう少しお互いの研究分野を勉強し合う必要があると思います。私見では、これら「2つの文化」の交流は、どうも一方通行に終わっているのではないかと危惧します。鳥学会のなかでは、近因の解明をホームグラウンドとしている者は、遠因の研究者の話をも勉強しようという傾向がありますが、その逆はどうも少ないのではないのでしょうか。もちろん私達の側の研究に耳を傾けるべき価値がない、ということでしたら、私達の側も、生態学系の研究者が興味をもって聴いてくれるような研究をしなければなりません。

昨年英国ケンブリッジ大学で神経行動学の国際会議がありました。行動生態学の教科書で有名なクレブスが、プレナリーセッションで講演しましたが、内容はすべて鳥類の貯食行動と脳神経系の可塑的变化に関わるものでした。行動生態学の親玉のような（と私は思っていました）クレブスが、現在では行動のメカニズムに興味をもっていることに私はとても驚きましたし、高名な研究者がそのような柔軟性をもっていることに感銘しました。なにをもって「理解」というかは、趣味の領域かも知れませんが、鳥の歌の理解には2つの文化からの歩み寄りが必要です。機能は構造を規定していくかも知れないが、構造に規定されている機能があることを知ることも大切です。忙しい毎日ですが、お互いに勉強し合うことが、鳥学会における「2つの文化」問題の解消には必要だと思います。

私は紆余曲折の末、1994年より千葉大学文学部に職を得ることができました。過去数年にわたり、上智大学生命科学研究所、農林水産省農業研究センター鳥害研究室、慶応義塾大学心理学研究室などを転々としておりましたが、その甲斐あって、生理学、生態学、心理学の各方面に首を突っ込むこととなりました。いろいろなことに興味を持つようになってしまって、おさまりがつかない状態ですが。

現在所属している千葉大学文学部は、予算や施設の面での制約はありますが、大講座制であるところから、研究の自由の点では恵まれています（それがいちばん大切なことです）。私の所属は認知情報科学講座というところで、私の他には行動分析学、行動計量学、言語情報処理、理論言語学の研究者がいます。こうしたひとたちに影響され、私自身は鳥の歌が時系列行動であることにより着目した、動的特性を考慮した研究を進めることになったような気がします。

---

来年度からは大学院博士課程自然科学研究科の担当もすることになり、そちらでは生物機構学講座に属する予定です。学部が文系で、大学院が理系ですから、学生の多様性が大きくなると期待しています。私の研究グループが「2つの文化」問題解消のきっかけを提案できれば、と思っています。  
(千葉大・文・認知情報科学)

---

## 第2回 国際アジアサイチョウ会議に参加して

水田 拓

4月10日～18日、タイで「第2回国際アジアサイチョウ会議 (The 2nd International Asian Hornbill Workshop)」が開催され、出席する機会を得た。この会議は、アジアにおけるサイチョウ類の研究者の間の研究結果報告及び情報交換の場として、4年に一度開催されている。しかしこの会議の目的は、単にサイチョウ類の研究だけでなく、この鳥の棲息する熱帯林というものを総合的に理解しようとするところにある。従って、サイチョウの棲息環境とその保護、餌となる動植物や競合する種について、あるいは動物園での飼育の実態や問題点など、実に様々な方面からの研究発表が行われている。そんなわけでサイチョウとは直接関係のない鳥の研究をしている私にもお呼びがかかったのである。

会議は、10日から12日までがエクスカーション、13日から15日の午前中までがセミナー、そして15日午後から18日までがKhao Yai 国立公園でのテクニカルワークショップ、という日程で行われた。私はこのうちエクスカーションとセミナーに参加したので、その様子をここに報告したい。

エクスカーションはバンコクの北西約350 km、ミャンマーとの国境付近にあるHuai Kha Khaeng 鳥獣保護区で行われた。このエクスカーションの主な目的は、ナナミゾサイチョウ (*Rufous-necked Hornbill*, *Acerosnivalensis*) の巣の観察である。森の中の研究施設に泊まり、翌日は早朝から3時間の山登りをしてサイチョウの巣にたどり着いた。巣の数十メートル手前にブラインドが木の枝や葉で巧みに作られており、そこに入って観察をする事ができる。サイチョウ類は雌が樹洞の中に閉じこもり抱卵、育雛をするという特異な繁殖習

性をもつ。私達が行った時はちょうど育雛期にあたり、雌と雛が樹洞の中において雄が1時間に一度くらいの割合で餌を運んでくるところが観察された。餌は木の実や昆虫で、雄はそれらをのどに蓄えて運んでき、巣の前にとまって一つずつ吐き出し、樹洞の入り口から嘴で雌に与えていた。私達も数時間ブラインドの中に入りっぱなしであったが、非常に美しい鳥で、見ていて飽きることはなかった。山道を3時間かけて登ってきた甲斐があったというものであった。

セミナーでは先程も述べたとおり様々な分野の研究が数多く発表された。ふだんあまり会うことのない国々の研究者の話が聞いたのは大変よかったが、発表の多くが事実の報告 (サイチョウがどこにいたとか何を食べていたとか) であり、その行動なり生態なりがどのような適応的意義をもつのかということまで突っ込んだ研究が少なかったのは少々残念だった。しかしこれは会議の性格上やむを得ないことだろう。アジアにおけるサイチョウ類の研究はまだ始まったばかりだといってよい。これから研究が進めばおのずとそのような議論も出てくるに違いない。個人的に興味深かった発表としては、サイチョウによる種子散布の研究、さえずりの音声分析の研究、飼育下のサイチョウに電気ショックを与えて射精させ、精子の形態やホルモン量を測定した研究などがあった。サイチョウ以外の研究では、トカゲの一種 *Butterfly Granularscaled Lizard* (*Leiolepis bellianarubritaeniata*) の生態についての発表が非常に興味深かった。

個人的なことになるが、私は前期博士課程の研究をタイで行った。今回この会議に出席して、そのときお世話になった多くの方々と

---

再会することができた。そしてあらためて感じたのは、自分が研究をする上でなんと多くの人達のお世話になってきたかということであった。研究は決して一人でできるものではない。

今回のサイチョウ会議で研究の結果を発表することができ、これで少しは恩返しできたかなと思っている。

(大阪市大・理・動物社会)

---

## 1996年度 鳥学会沖縄大会報告

1996年度の大会は沖縄国際大学を会場にして、9月14日から16日の3日間にわたって行われました。内容をシンポジウムと特別講演、口頭発表、ポスター発表に分けて、3人の方にそれぞれ報告してもらいます。

### シンポジウムと特別講演の報告

野間直彦

シンポジウムは、「やんばるの鳥と自然—絶滅は防げるか—」と題して行われ、はじめに5人の講演があった。横山昌嗣氏は、やんばるには植物にも北限になっている種や隔離されて独自の進化をとげた固有種が多いことを紹介された。最近も新種が10種近くも発見されていると聞いて驚いた。また沖縄県版の植物レッドデータブックが近く完成するが、保護を有効にするための条例の制定などは遅れているとのことであった。花輪伸一氏は、琉球列島の鳥の研究史と、ノグチゲラの現状について話された。以前は100羽内外といわれていたのが、最近の推定では500羽ほどだという。これは増えたのではなくて米軍の北部演習場のなかで調査が進んだ結果だ。だが、全体としては生息できる林は確実に減りつつあるという。原戸鉄二郎氏は、移入された捕食者によって絶滅寸前になってしまったグアムクイナとロードハウクイナの保護事業を体験してきた報告をされ、そこからヤンバルクイナを絶滅させないための教訓を引き出した。移入種・帰化種は普通、原生的な自然の中には入っていけないものだが、やんばるでは高密度につくられた林道沿いに、マングースやソネコなどが生息するようになっているという。伊藤嘉昭氏は個体群統計学・遺伝学の保全への応用の最新の成果を紹介された。動物が絶滅を免れるのに最低限必要な個体数(最小存続可能個体数; MVP)は、かつては50

匹と言われていたが、最近は遺伝的要因や環境のカタストロフも考慮に入れると1000匹以上と考えられるようになっている。琉球列島の固有種はすでにこの数以下になっているものがあると考えられるが、確かなことはわかっていない種が多い。やんばるでも質の高い調査をはじめめる必要を強調していた。国安俊夫氏は、環境庁の取り組みを紹介された。「やんばる野生生物保護センター(職員1~2名)」の建設や、調査・保護増殖などいくつかの事業が始まっている。公共事業で数億円の建物を建てるのは難しくないのだが、環境庁の予算は少ないので、人件費や研究に数千万円規模の予算をとるのに非常な苦勞をしているという。

5氏ともに、返還が予定されている米軍の北部演習場地域の原生林を丸ごと、嚴重な保護区にすることが必要と訴えていたのが印象深かった。皮肉なことだが、この地域が手をつけられない「聖域」になっていなかったら、ノグチゲラもヤンバルクイナもすでに絶滅していたかもしれないという(私も大会後に見たが、素晴らしい林が広く残っている)。

総合討論では「公共事業」のあり方が議論になった。やんばるの自然破壊の大部分は、公共事業による伐採や土木工事が原因である。産業・生活基盤を整備するためのものだが、ある分野が整備されても同じやり方が続き、行き過ぎになってしまったのがいけないのだ。

幸い、地元のためになるのであれば今の形にはこだわらないという意見も出ているらしい。環境庁のセンターも公共事業でつくるのだが、研究者からは「その建物にけるお金を人件費に回せたらよいのに」という趣旨の発言もあった。将来的にはその方向に変えて行くべきだが、それには時間がかかりそうだ。地元からの参加者の「とりあえずは今の制度の中で知恵を絞る。建物も、地域の核になる施設としては役に立つ。そこから保護に対する理解を広げていきたい」という発言に感心した。固有種の回復につながる金の使い方をしてほしい。観光面ではエコツーリズムを普及させようという提案もあった。

応用の話に偏っていた、一般の参加者にも理解可能な点から議論をはじめべき、等の批判も出た。だが、全体として社会・研究・行政のどこに問題があり、今何をすべきかが、かなりの程度共通の認識になったという点で、大きな成果があったシンポジウムであった。

2日目の特別講演は、ジェフリー・R・ウォルターズ氏による「ホオジロシマアカゲラの生態と保全」であった。この種は、米国南東部のダイオウショウという松の林の、山火事が定期的に起きて下層植生のない場所にすむ。巣穴は、樹齢100年以上の生きている大木に掘る。同じ穴を10年以上も使うが、いつも新しい穴を掘り続けていて、1つの穴を完成させるのに6年(!)もかかるという。ダイオウショウが伐採されて林が減り、営巣できる大木も少なくなってしまう、個体数が減り続けて絶滅のおそれが出てきた。

ホオジロシマアカゲラは共同繁殖をする。

17年間に、225群の全個体に足環で標識して個体識別し、いつも600羽以上(!)の個体をモニターするという圧倒的な調査によって、その実態が明らかになった。繁殖するつがいとヘルパー(多くの場合は息子で、1羽)とでグループを作りナワバリをもつ。♂の繁殖鳥はほとんどナワバリを変えず、その♂が死ぬとヘルパーがナワバリを「相続」し、♀は出ていく。巣穴を得にくいので、滅多に新しいグループは創設されず、ナワバリの変化は少ないという。だから、ヘルパーになって待ち、よいナワバリを相続するのが有利になるのだ。♀は死亡率が高く、ナワバリ♀の空きができやすいのでヘルパーにならない。

繁殖のためには巣穴を得られることがカギであることがわかったので、それまで試みられて失敗した保護策に代えて、ドリルで木に穴を開け人工巣穴をつくらせたり、人工山火事で林床の低木を焼き払うことを始めた。その結果、新しいナワバリがつくられるようになって、1991年以後は個体数が増え続けているという(毎年10%も!)。その種に独特の繁殖習性が研究された結果見出された繁殖支援策が有効で、絶滅の危機を脱した(5年前から)という、基礎的な研究が保護に役立った見事な例を見せてもらった。ほかの絶滅危惧種の保護を考える上でも参考になり、希望が湧いてくる気がした。講演は2時間以上に及んだが、氏は丁寧に話され、一項目ごとに要点を整理したスライドと百瀬浩氏の正確な通訳の助けで、よく理解することができた。発表の仕方も手本にしたいと思う。

(森林総合研究所九州支所)

## 一般講演(口頭)の印象 —さらなる質の向上には、若手研究者の奮起が必要?—

西 海 功

一般講演は、近年、3会場に分けておこなわれることが多かったが、今回は2会場に収まり、また会場も同じ階の隣り合う教室ということもあり、いつもほど慌ただしくなく、落ち着いて聞くことができた。演題数は47で、昨年よりも少し少なかったが、その分全

体的にレベルが高く、また広い分野が扱われていたように感じた。

研究分野では生態学、行動学関連のものが多くを占めていたが、その内容は繁殖生態、採餌生態、ハビタットの選択、渡り、さえずり、保護など多岐にわたっていた。また、内

分泌学の発表も昨年同様かなり見られた。特筆すべき今年の特徴は2つあると思う。一つは、分子系統学が初めて見られたことだ。しかも複数の発表があった。鳥学会で分子系統の発表がもっと活発になり、質も向上すれば、形態による分類との関係が興味深くなってくる。昨年の大会印象記で馬場さんも指摘したように、近年、形態分類の発表がないのはますます残念に思う。もう一つの特徴は、開催地が沖縄ということも関係していると思うが、地域変異に関する発表が多く印象に残ったことだ。形態、羽色、さえずりなどの表現型の変異からDNAの変異まで、様々な鳥での興味深い発表があり、どれも今後の研究が楽しみなものばかりだった。共同研究によって研究の質が大きく向上することはどんな研究にも言えることだが、地域変異の研究は特に複数の分野の研究者の協力が望まれる分野だと思う。まだまだ鳥の研究者人口は少ないので、共同研究の条件は合にくいのが現状だと思うが、そういった方面での努力もますます必要だろう。

議論は多くの講演で非常に活発に（時には険悪なほど活発に）なされていた。アマチュアや学生の優れた発表の後には、しばしば演者の周りにおおくの若手研究者が集まり、ディスカッションやアドバイスがおこなわれていた。研究者とアマチュア、学生の間により関係があるように感じた。こういった縦でも横

でもないつながり、斜めのつながりは鳥学会のすばらしいところだと思う。

沖縄まで足を運ぶだけの意欲と時間があるというセレクションがかかっていたためか、特に学生とアマチュアの講演に質の高いものが多かったように思う。他の学会では通常若手の研究者が最先端を担っていることが多いと思うが、鳥学会ではそれほど顕著では無いように感じる。若手の研究者が、アドバイスの面だけではなく、研究の質の面でも学生やアマチュアをリードしていく存在になれば、学会全体のレベルも大きく向上するだろう。もちろん、主な問題は若手研究者の能力や努力にあるのではなく、その研究環境・研究条件にあるだろうが、私の場合には研究環境は相対的に恵まれている方なので、努力してもっとよい研究をしなければと感じた次第である。

ニュース編集の方からこの原稿を依頼される時に、単なる「感想」ではなく「鋭く斬り込んで」書くようにと要望を受けたのだが、ぜんぜん鋭くならなかった。逆に私の能力のなさから、多分にとりよりも完全に主観的なものになってしまったことを最後にお詫びしておきたい。

（国立科学博物館）

（ポスター発表の報告は次号に掲載します。）

## 東南アジア熱帯雨林の鳥類研究の現状

永田尚志

熱帯雨林の鳥類群集の研究は、アメリカの研究者を中心として1970年代に中南米で盛んに行われるようになった。同時期に東南アジアでは、アメリカやオーストラリアの研究者を中心としてニューギニアで研究が行われた。しかし、インドシナ半島やインドネシアでは政治的に混乱していたため、記載的な研究以外はほとんど行われてこなかった。その中でもマレーシアは早くから政情が安定したため、ボルネオ島のサバ、サラワクを中心に欧米の研究者による短期の調査はいくつか行われているが、中南米に比べればかなり遅れている。大英帝国がインドシナ地域で収奪した標本がシンガポールのラッフルズ博物館（現在は、シンガポール国立大学内博物館に移管）に集められているので基本的な資料は揃っている。鳥類相等の記載的な研究はマレーシアに住みついた英国人研究者によって行われ、マレーシア人の鳥類研究者はほとんどいないのが現状である。東南アジアで研究を始める際には、カウンターパートが必要となるが、

---

このカウンターパートを見つけるのが大変である。たいていは、鳥類学と全く関係のない研究者にカウンターパートを頼むことになる。私は、1992年からマレーシアで熱帯雨林の鳥類群集の調査を開始したが、カウンターパートはコウモリの研究者である。

熱帯雨林というとジャングルで派手な色の鳥たちがたくさん飛び回っているのを想像するかもしれないが、実際は森林中を歩いていても滅多に鳥に会うことはない。ただ熱帯林の鳥は混群を作るため、一旦混群に出会うと数十種類の鳥たちに一度に会うことになる。しかし、一日中、歩き回って1~2回しか混群には会えないのが実情である。また、低緯度地方は薄明の時間帯が短いため朝のコーラスも1時間程度で終わってしまううえ、日中はセミの鳴き声が騒がしくて鳥の気配は消えてしまうので、温帯で普通行っているようなセンサス法は使えない。そこで確実に鳥類群集を定量的に調べるのに使われてきたのがカスミ網による体系的な捕獲である。マレーシアのパソにおいても林床性鳥類は約20種しか観察できないが、カスミ網を使うことによって80種近くも確認することができる。80種のうち上位34種は複数個体捕獲されているものの、残りは3年間で1個体しか捕獲されていない。カスミ網の利点は普段観察できない鳥も捕獲できることであるが、大きな鳥は効率的に捕獲できないし、地上付近を行動している鳥しか捕獲できないという欠点もある。また、熱帯雨林の鳥類群集は種類数は多いが、1種類の生息密度は温帯に比べてかなり少ないので繁殖調査には適さない。東南アジアの熱帯雨林では地上30~50mの樹冠部に生息している鳥が林床部で観察されることはほとんどない。したがって、カスミ網による調査では林冠部の鳥類群集は明らかにされない。東南アジアに限らず林冠性鳥類群集の定量的研究は未だあまり行われていない。現在、サラワクのランビルを初めとして各地で林冠歩道が建設されているので、今後林冠鳥類群集も明らかにされていくだろう。

熱帯雨林に生息する鳥類の特徴として、成鳥の死亡率が低く寿命が長いこと、クラッチサイズが小さいこと(1~2卵)、巣の捕食率が非常に高いことがあげられる。小鳥でも10年以上は生存するので、個体群生態学的研究には長い期間が必要となる。1970年代後半から1980年代前半にかけて、熱帯林に関する数多くの群集パターンやギルド構造の論文が出版された後、進展が少ないのは、直接観察が難しいことと長期研究が必要なためであろう。現在、比較的多く行われているのは、短期間で調査可能な人工巣を用いた捕食実験による周辺効果の検出や、観察しやすい果実食鳥類の種子散布に関する研究である。林縁部や公園には個体数が多く観察しやすい鳥類も多いが、東南アジアではあまり研究されていない。熱帯雨林は玉手箱のようにいろんなものが飛び出してくる可能性は高く興味深いのは事実であるが、温帯域に比べて労力の割にデータが集まらないのも事実である。熱帯林で鳥類研究を始める場合は、この点を覚悟しておいた方がよい。とはいうものの、政情不安定のため調査できなかったベトナム、カンボジア、ラオスはこれから有望な調査地となるので是非チャレンジしてもらいたい。最後に、東南アジア諸国は、先進国による知的略奪と自然保護という名もとの内政干渉には神経を尖らせていることも肝に銘じておいて欲しい。

(国立環境研究所・野生生物保全研究チーム)

---

## 津戸基金シンポジウムのご案内

「アジア・太平洋地域における鳥類の進化・生態学とDNA多型利用の可能性」

演 者：上田恵介 「アジア・太平洋地域における鳥類の進化学的研究の重要性」

石田 健 「コゲラの地理変異と種分化、日本列島周辺の問題」

---

梶田 学 「ウグイスとメジロのミトコンドリアDNAによる地域個体群比較」

西海 功 「鳥類研究におけるマイクロサテライトDNA利用の可能性」

開催日時：1997年1月25日(土) 14:00～17:00

場 所：立教大学・12号館・G201教室(2F)

世 話 人：上田恵介・石田 健

～ タイトル・演者は変わることもあります ～

## お 知 ら せ

### 【編集委員会】

#### 学会の費用による英文校閲および論文作成指導のお知らせ

過日、沖縄で開かれた評議員会で、「日本鳥学会誌に受理された論文は、原則として学会が指定した英文校閲者に英文校閲を依頼し、その費用は学会が負担する」ことに決まりましたので、お知らせします。この英文校閲の対象は、原著、短報を問わず、英文論文の本文、要約、図の説明、表、および和文論文の英文要約、図の説明、表です。今回の改訂のねらいは、学会誌の質をより高めるとともに、会員がより投稿しやすいものにする事です。

これまで、英文校閲を投稿者個人の責任にゆだねていましたので、英文を校閲してもらう適当な人物を知らない場合には、このことが投稿の大きなネックとなっていた点を改善するものです。ただし、論文を投稿する場合、英語表現が不十分でもよいという意味では決してありません。意味の通じないものは、受付段階でチェックいたします。

会員の中には、貴重な資料を持っているが、論文を書いた経験がない、あるいは指導教官がいないなどで論文にできない方が多くいます。そのため、これまで学会では、鳥学会大会の折りに論文作成のための相談室を設けるなどの試みをしてきました。しかし、学会中はお互いに忙しいなどの理由もあり、十分な成果を上げることができませんでした。そのため、今回から編集委員長と副委員長が窓口となり、論文の内容に応じ、論文作成のためのアドバイスと指導をしていただく方を紹介することになりました。論文にまとめたい、あるいは論文にまとめたいがまだ投稿するには自信が持てない方など、遠慮なく相談して下さい。論文として投稿できる段階までのアドバイスと指導を、編集委員長から依頼する形をとってゆきたいと思えます。

(編集委員長 中村 浩志)

## 鳥学ニュース No.61

1996年11月1日 発行 (会員配布)

発行 日本鳥学会

〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学理学部 動物社会学研究室気付

TEL. 06-605-2607 FAX. 06-605-3172 郵便振替口座 00110-0-6599

発行人 山岸 哲

印刷所 株式会社印刷

編集 江崎保男・水田 拓